

(様式3)

外国人児童生徒等教育アドバイザー派遣結果報告書

都道府県名	兵庫県	市町村名	芦屋市	大学名	
派遣日	令和3年10月11日(月曜日) 14:45~16:45 ・オンラインによる講話のため、14:45より接続テストおよび、研修全体の流れについて打合せ。 ・15:15に、参加者全員の入室を確認。研修開始。				
実施方法	※いずれかに○をつけてください。 派遣 / 遠隔				
派遣場所					
アドバイザー氏名	櫻井 千穂 氏 (大阪大学大学院言語文化研究科講師)				
相談者	芦屋市教育委員会				
相談内容	○日本語指導の実際について ・CLD 児童生徒への支援策について				
派遣者からの指導助言内容	<p>●自文化中心主義から文化相対主義へと考え方を転換していかなければならない。</p> <ul style="list-style-type: none">・すべての文化は優劣で比べるものではなく、対等であると考え、その文化・社会のありのままの姿をよりよく理解しようとするのが大切。 <p>●子どもの言語発達(習得)と、大人の外国語学習を同一のものとしてとらえてはならない。</p> <ul style="list-style-type: none">・子どもは、聞く→話す→読む→書くの順でできるようになる。また、それらは、意味のある活動を通して、ことばを使いながら習得する豊かな環境の中で体験を通して覚える。意味を伴わない文字の書き取りプリントだけをしていても定着しない。 <p>●生活言語能力と学習言語能力は異なる。学習言語能力にも焦点を当てた指導が大切</p> <ul style="list-style-type: none">・学年とともに、日常会話ではほとんど聞くことのない低頻度の語彙、複雑な構文や抽象的な表現などが出てくる。教科学習においては、言語的にも概念的にも高度な文章を理解することが要求され、また正確にまとまった形で使うことが要求される。教科領域の読解力を伸ばすためには、弁別的言語スキルの習得方法とは異なった指導法が必要とされる。読解力育成に焦点を当てた多読が必須である。・母語で概念・知識を持っている児童に対しては、伝えたい概念・知識を日本語でどう表せばいいかをサポートすることで、日本語習得が進む。・一方、教科学習の場面で「わかる」「できる」授業を受けられていない児童は、たとえ母語であったとしても、概念・知識を説明することができず、ことばの習得は進まない。 <p>●効果的な実践1：日本語と内容の統合学習を行う</p> <ul style="list-style-type: none">・子どもにとって「意味」のある教科やトピックを学習していく中で、日本語の表現や語彙を活用しつつ、ふやしていくのが大切。・ことばがわからなくても「内容」がわかる・参加できるしかけづくりが大切。子どもが持っている知識・リソースを活用し、アイデンティティを肯定する。				

(様式 3)

	<ul style="list-style-type: none">・「内容」と「日本語」の目標を立てることが大切。この内容を扱う中で、どんな日本語が学べるか、対象となる子どもにとって必要な表現は何かを検討する。 <p>●効果的な実践 2：二言語での段階的読み書き学習を行う。</p> <ul style="list-style-type: none">・読んだ内容を話す・書く、つまりインプットとアウトプットを同時に起こす学習を行う。・子どものレベル・興味にあう「本」にたくさん触れながら、段階的にレベルをあげていく。・現状のレベルの把握と、レベルをあげるための適切な支援がポイントとなる。 <p>●効果的な実践 3：母語先行型学習／母語・継承語のプロジェクト型学習を行う。</p> <ul style="list-style-type: none">・母語で培った知識を生かして、日本語と教科の学習を進めていく。・アイデンティティを大切にし、経験を活かしつつ、使える読み・書きの力につなげる。 <p>●効果的な実践 4：多文化共生教育を行う。</p> <ul style="list-style-type: none">・個々の子どもの現実を見つめることから出発する。・自文化中心主義から文化相対主義へと考え方を転換していく。
相談後の方針の変化、今後の取組方針等	<p>●学習言語能力に着目した授業づくりへの転換を図る。</p> <ul style="list-style-type: none">・市全体として、子ども一人ひとりのアイデンティティを大切にし、興味関心のあ る「内容」の中で、つかえる日本語を増やしていく。【インプットへの焦点】・子どものレベル・興味を把握し、母語で培った知識や形成されている概念が生か される教科学習を進める。【アウトプットへの焦点】・子どもが「伝えたい」内容について、日本語では「どう表現」するのかを教える 支援策について、担任や入り込みのボランティアに、特に啓発していく。【支援の 考え方への焦点】

1枚にまとめる必要はありませんので詳細に記載願います。

なお、本報告書の内容は、文部科学省ホームページで公開いたします。